

バラ語の否定標識*

王 海波
(嶺南師範学院)

キーワード：バラ語、否定標識、満洲語文語、女真語、キーレン語

1. はじめに

バラ語（巴拉語）は満洲語系の言語（または満洲語の方言）である。バラ語に関する言語学的調査を行った研究者は、管見の限り、穆曄駿のみである。バラ語の記録は主に穆曄駿（1984b; 1987; 1988a）にあり、穆曄駿（1984a; 1985; 1986; 1988b）にも若干散見される。バラ語は主に張広才嶺の山岳地帯に分布していたが、1982年に消滅した（穆曄駿 1985: 5）。

穆曄駿（1987: 31）はバラ語の否定標識として [asəi], [eiwə], [ɔgəi] を挙げている。また、穆曄駿のバラ語の記録には他の否定標識も確認される。バラ語の否定標識を包括的に整理した研究はこれまでに存在しない。そこで本稿では、穆曄駿（1987: 31）で報告された [asəi], [eiwə], [ɔgəi] について他言語における同源要素を考察するとともに、穆曄駿のバラ語資料に見られる他の否定標識の具体例を挙げ、それらについても同様に他言語における同源要素を検討する。

2. 穆曄駿（1987: 31）が挙げたバラ語の否定標識

2.1. [asəi]

バラ語の [asəi] については、穆曄駿（1987: 31）は次のように記述している。和訳は筆者による。

[asəi] 词缀。此缀既可单用亦可接干，系巴拉语否定式词缀，其含义为“没有”或“未”，相当于满语的 [hak'ω], [k'ək'ω]。相当于赫哲语的 [rsən]，恰语的 [ts'ən] 等词缀。亦相当女真语的 [uruwəi] 词缀。（穆曄駿 1987: 31）

和訳：接辞 [asəi]。この接辞は単独で用いられることもあれば、語幹に接続されることもある。バラ語の否定接辞であり、「ない」または「未だ～していない」という意味である。これは満洲語の [hak'ω], [k'ək'ω] や、ヘジェン語の [rsən]、キャッカ語の [ts'ən] などの接辞に相当する。また、女真語の接辞 [uruwəi] にも相当する。

上記の内容から次のような2つの情報が得られる。

[1] バラ語の [asəi] は単独で用いられて「没有」の意味（「ない」、「存在しない」の意と考えられる）を表す場合もあれば、語幹（動詞語幹と考えられる）に接続されて「未だ～していない」を表す場合もある。

[2] バラ語の [asəi] には「相当」する他の言語における要素が存在する。穆曄駿のいう「相当」とは、語源的な対応ではなく、用法（機能）上の対応と考えられる。すなわち、機能的に満洲語（満洲語文語と考えられる）の [hak'ω], [k'ək'ω]、ヘジェン語の [rsən]、

* 本稿は、中国国家自然科学基金後期資助項目「満語支語言音系学研究」（課題番号 22FMZB009）の助成を受けた研究成果の一部である。

キャッカ語の [tʰən]、女真語の [uruwəi] に対応するというのである。

満洲語文語の [hak'ɔ], [k'ək'ɔ] は、メレンドルフ転写ではそれぞれ hakū と kekū であり、完了相の否定標識である。これらは完了相接辞 {-ha} (-ha, -he, -ho, -ka, -ke, -ko, -ngka, -ngke, -ngko) と否定接語 akū が融合した形式である。{-ha} と akū が融合しない形式も存在する (Hölzl 2018: 256) が、融合した場合の形式は -hakū, -kekū のみならず、-hakū, -hekū, -kakū, -kekū, -ngkakū, -ngkekū の 6 種類が存在する¹。

ヘジェン語の否定標識 [rsən] は、正しくは [rʃən] であると考えられる。李林静 (私信) によれば、ヘジェン語キーレン方言 (即ち本稿でいうキーレン語) のこの否定標識は「未だ～していない」という意味ではなく、「～しない」という意味を表す。

女真語の [uruwəi] については、金光平・金啓琮 (1980: 249) において usu wei と表記され、「未」の意味で用いた例が挙げられている。

バラ語の [asəi] の語源に関しては、『女真訳語』乙種本にある女真語の「𡵓𡵓」(漢字音写=阿隨; 漢訳=無) がバラ語の [asəi] と同源であると考えられる (Hölzl 2015: 136)。この「阿隨」については、Kiyose (1977: 136)、金啓琮 (1984: 25, 37, 180)、Menges (1987: 12)、烏拉熙春 (2009: 70) がそれぞれ *asuwi, *a sui ~ *a-sui, *asuj, *a-sui と再建している。女真語のこの「阿隨」は、『女真訳語』乙種本における漢訳が「無」であり、同書においては「有」を表す「別厄」のすぐ下に収録されているため、「～がない」という意味であると考えられる。すなわち、[asəi] の 1 つめの意味「没有」に相当する。

2.2. [eiwə]

バラ語の [eiwə] については、穆曄駿 (1987: 31) は次のように記述している。和訳は筆者による。

[eiwə] 词缀。此为巴拉语否定式词缀，相当于满语的 [ak'ɔ], [rak'ɔ], [k'ɔ] 等词缀，此缀亦可独立成词，不与词干发生接缀关系，当然亦可接缀，这在巴拉语里未经过规范的情况下，接与不接都可。此缀在赫哲语与恰喀拉语里与上一个 [asəi] 词缀相同。(穆曄駿 1987: 31)

和訳: 接辞 [eiwə]。これはバラ語の否定を表す接辞であり、満洲語の [ak'ɔ], [rak'ɔ], [k'ɔ] などの接辞に相当する。この接辞は単独で語を為すことも可能であり、語幹との接続関係を必ずしも必要としない。もっとも、(語幹との) 接続関係も可能である。バラ語においては規範化が進んでいないため、(語幹に) 接続する場合としない場合の両方が許容される。この接辞はヘジェン語とキャッカラにおいて、前の [asəi] のところで述べた接辞と同様である。

上記の内容から、[eiwə] は単独で用いられる場合と、語幹に付加される場合の両方があることが分かる。ただし、これに対応する漢訳は付されていない。また、満洲語文語の [ak'ɔ], [rak'ɔ], [k'ɔ] (メレンドルフ転写ではそれぞれ akū, rakū, kū) に相当するとの記述がある。原文では満洲語文語の [ak'ɔ] (メレンドルフ転写では akū) を「词缀」(接辞)

¹ -ho と akū が融合した形式は -hakū である。例えば、『増訂清文鑑』bontoho の説明文における tohohakū, jingkini beye の説明文に見える orolohakū, saniyashūn の説明文に見える šoyohakū, subuhūn の説明文に見える soktohakū などが挙げられる。また、早田輝洋 (2003: 5-6) もこの点について言及しており、ojohakū の例を提示している。一方、烏拉熙春 (1985: 141) および早田清冷 (2015: 112) は、-hakū と -hekū に加えて -hokū の形式にも言及している。さらに、鋤田 (2023: 163) が引用した大阪大学所蔵『満文西遊記』には、onggohokū 「忘れなかった」という例が見られる。当該形式については、確認が必要である。

と呼んでいるが、実際には一般の接辞より独立性が高いと考えられる。*akū* は「～がない」などを意味するため、これに対応するバラ語の *[eiwə]* も、単独で用いられる場合には同様に「～がない」などを表すと推測される。なお、原文における満洲語文語の *[k'w]* (メレンドルフ転写では *kū*) については、動詞に付く *-hakū/-hekū* などの *kū* の部分である可能性や、*gebukū simhun*「薬指(文字通り「名のない指」)」の *gebukū* (<*gebu akū*) や *derakū*「厚顔無恥」(<*dere akū*) のような名詞に付く *kū* である可能性も考えられる。したがって、満洲語文語の *[ak'w]*, *[rak'w]*, *[k'w]* に対応するということは、*[eiwə]* が「～がない」、「～しない」、「～していない」のいずれの意味も表し得ることを示唆すると考えられる。

バラ語の *[eiwə]* の語源については、女真語の **ei ə* との関連性があると考えられる。金光平・金啓琮(1980: 249) は、女真語の **ei ə*「不」と **eixə*「不曾」に言及している。また、Hölzl (2018: 251) は、バラ語の *[eiwə]* と『女真訳語』乙種本の「忤臭」(漢字音写=厄一黑; 漢訳=不曾)との語源的関連を推定している。この「厄一黑」については、Kiyose (1977: 123)、金啓琮(1984: 139, 221)、烏拉熙春(2009: 76) がそれぞれ **eihe*, **ei-xə* ~ **ei-x²*, **əi-hə* と再建している。さらに、Hölzl (2015: 129) は、女真語の **eihe* がツングース諸語の否定動詞 *e-* や満洲語文語の *esi*「当然」における *e-* と語源的に関連する可能性にも言及している。

2.3. *[ɔgəi]*

バラ語の *[ɔgəi]* については、穆曄駿(1987: 31) は次のように記述している。和訳は筆者による。

[ɔgəi] 词缀。系巴拉语否定词，相当满语的 *[wak'a]*，相当于女真语的 *[quai y]*。(穆曄駿 1987: 31)

和訳：接辞 *[ɔgəi]*。これはバラ語の否定辞であり、満洲語の *[wak'a]* に相当し、女真語の *[quai y]* に相当する。

原文にはバラ語の *[ɔgəi]* の漢訳が付されていないため、その意味は満洲語文語と女真語における対応語から推定するほかない。満洲語文語の *[wak'a]* (メレンドルフ転写では *waka*) は「～ではない; 非」を意味する。女真語の *[quai y]* については、金光平・金啓琮(1980: 200) が *quai-jy* と表記し、形容詞を否定する要素であると説明しているが、同書が挙げた例を見ると、形容詞だけでなく名詞を否定する用法も確認される。

穆曄駿(1987: 31) の原文では、バラ語の *[ɔgəi]* は満洲語文語の *waka* に相当すると記述されている。この記述に対し、Hölzl (2015: 136) は、バラ語の *[ɔgəi]* が満洲語文語の *waka* と関連する可能性は低いと論じている。しかし、バラ語の *[ɔ]* が満洲語文語の *wa* に対応する例は他にも存在する。例えば、バラ語の *[ɔrdimi]*「終わる」(穆曄駿 1987: 11) は、満洲語文語の *wajimbi*「終わる」に対応すると考えられる。

また、バラ語の *[ɔgəi]* の語形は、モンゴル語の否定標識 *ügei* [*uge*: ~ *uqui*] と類似している(モンゴル語のこの語については内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 1999: 311 を参照)。池上(1999[1993]: 33) はバラ語の *[ɔgəi]* はモンゴル語の *ügei* と同じ語であると推測し、Hölzl (2015: 136) もバラ語の *[ɔgəi]* はモンゴル語の **üge(y)i* からの借用である可能性を指摘している。しかし、この *ügei* からの借用説には以下の2点の問題がある。

[1] モンゴル語の *ügei* の文法機能は、満洲語文語の *waka* よりむしろ *akū* に近い。ま

² 後者の表記では語末の *ə* が欠落しているが、これは誤植であると考えられる。

た、満洲語文語の *waka* に近い機能を持つモンゴル語の形式は *bisi* である (高娃 2005: 204, 383 参照)。

[2] 穆曄駿 (1987: 22) によると、バラ人とモンゴル人との交流はほぼ皆無である。

ただし、バラ語にモンゴル語由来の借用要素が全く存在しないわけではない。以下のような例が挙げられる。

(a) バラ語の [murə] 「水」 (穆曄駿 1987: 7) は、モンゴル語の *mören* 「大きい川」からの借用である可能性がある (池上 1999[1993]: 332)。

(b) バラ語の [t'ərgəmi] 「赶马车」 (穆曄駿 1987: 7) の語幹 [t'ərgə] も、モンゴル語起源と考えられる。満洲語文語には *tergeci* 「車夫」があり、これもモンゴル語からの借用語であると考えられる。

(c) 穆曄駿 (1987: 17) は、バラ語の [maqəri] が満洲語文語の *niyanciha* に対応しているが、これは意味的な対応に基づく解釈である。関雲路 (私信) によれば、むしろ満洲語文語の *mager* 「一种野草」 (胡增益 2020: 828 に収録) と同源である可能性が高い。さらに Sulfa (私信) によると、満洲語文語の *mager* は『御製清文鑑』の *šanggiyan selbete* の説明文中に現れ、モンゴル語の *meker* に由来する可能性がある。アルチュカ語にも同源語が確認される (穆曄駿 1987: 17; 王海波 2025: 271)。

(d) バラ語の [dahu] 「皮衣」 (穆曄駿 1987: 8, 29) は満洲語文語の同じ意味の *dahū* と語源的関係があると考えられる。満洲語文語の *dahū* はモンゴル語からの借用語である (Цинциус и др. 1975: 192; Rozycki 1983: 80)。

(e) バラ語の [ɟən] 「左」 (穆曄駿 1987: 12) の語源については、王海波 (2025: 271) を参照されたい。

(f) バラ語の [ga] 「大山火」 (穆曄駿 1987: 20) の語源については、Sulfa (私信) がモンゴル語の *gai* [gæ:] 「災難」と比較している。モンゴル語のこの語は内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 (1999: 732) を参照されたい。

(g) バラ語の [havə ɔldə] 「衙署」(役所、衙門) (穆曄駿 1987: 13) の語源については、満洲語文語の *hafan* 「官吏」+ *ordo* 「亭式の宮殿」の同源語に由来すると考えられる。満洲語文語の *ordo* はモンゴル語の *ordo* (内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 1999: 220 では「宮殿」や「官邸」等と訳出) からの借用語であり (Rozycki 1983: 222)、穆曄駿 (1988a: 4) によると、バラ語の [ɔldə] (漢字音写では「臥魯朵」) は古代モンゴル人あるいは契丹人との交流に由来するという。

要するに、バラ語の [ɔgəi] は、機能的には満洲語文語の *waka* 「～ではない」に近いとされる一方で、形式的にはモンゴル語の *ügei* 「～ない」に類似している。[ɔ] と *wa* の音対応が不可能とは言えず、また、*akū* に近い機能から *waka* に近い機能への移行も想定できないわけではない。バラ語の [ɔgəi] がモンゴル語の *ügei* と満洲語文語の *waka* のいずれと語源的に関連するかについては、さらなる研究が待たれる。

3. バラ語における他の否定標識

3.1. [ɾfən]

4 番目の否定標識は [ɾfən] である。[zɾfən] の形式もある。穆曄駿が記録したバラ語の [ɾfən]～[zɾfən] の使用例は以下の通りである。

- (1) (a) [ənərɾfən] 「不去」(行かない) (穆曄駿 1988a: 11)
- (b) [arərɾfən] 「不写、不做」(書かない; しない) (穆曄駿 1988a: 11)
- (c) [jaburɾfən] 「不走、不行」(行かない) (穆曄駿 1988a: 11)

- (d) [p'ʊfɪlɔɹʃən], [p'idilɔɹʃən] 「举止没人样」(行儀が良くない) (穆曄駿 1988a: 21)
- (e) [p'idilɔɹʃən], [p'ʊfɪlɔɹʃən], [p'udilɔɹʃən] 「不成样子」(行儀が良くない) (穆曄駿 1988a: 22)

穆曄駿 (1988a: 11) は、バラ語の [ɹʃən] が女真語の [əʃin] に近いと記述している。『女真訳語』乙種本には「~~申~~列」が記録されており (漢字音写=厄申; 漢訳=不)、Kiyose (1977: 136)、金啓琮 (1984: 90, 132, 244)、烏拉熙春 (2009b: 77) がそれぞれ *ešin, *əʃi-in, *əʃin と再建している。Hölzl (2015: 128-129; 2018: 251) によれば、女真語の「厄申」はエウエンキ語の e-si-n、エウエン語の e-s-ni、ソロン語の ə-ʃi-ŋ、ウデヘ語の e-(h)ji-ni、オロック語の e-si-ni と同源であり、本来は「否定-現在-三人称単数」の三つの形態素から構成されていたとされる。Цинциус и др. (1977: 432) も女真語の「厄申」とエウエンキ語などの ə- を比較している。さらに、前述のようにキーレン語にも対応する否定標識 [ɹʃən] が存在し、例えば ənərʃən 「行かない」 (安俊 1986: 63; Zhang et al. 1989: 96) ³ のような例がある。穆曄駿 (1988a: 11) も、バラ語の否定標識 [ɹʃən] はヘジェン語と類似していると指摘しているが、ヘジェン語における否定標識の具体的な形式については言及していない。Hölzl (2018: 251) は、バラ語における「動詞+[ɹʃən]」の結合が独自に発展したというより、むしろキーレン語からの借用である可能性が高いと推測している。

穆曄駿 (1988a: 11) の記述によれば、バラ語の [ənərʃən] などにおける [ɹʃən] の文法機能は満洲語文語の [rak'ɔ] (メレンドルフ転写では rakū) に相当する。一方、穆曄駿 (1987: 31) の記述によれば、バラ語の [eiwə] の文法機能は満洲語文語の [ak'ɔ], [rak'ɔ], [k'ɔ] (メレンドルフ転写ではそれぞれ akū, rakū, -kū) に相当する。すなわち、バラ語において満洲語文語の -rakū に相当する文法機能を持つ要素には [ɹʃən] と [eiwə] の二種類が存在するということになる。しかし、両者が -rakū を表す際の機能的な差異については、明確な記録は残されていない。

満洲語文語には fujurakū 「無体統」(体裁がない) と fujurungga 「体面、有風采」(体裁が良い、風采がある) があり、これらの存在は、名詞語基 *fujuru が存在していたことを示唆する⁴。この名詞 *fujuru は、バラ語の [fuʃɪlən] 「体面或像样」(体裁が良い) (穆曄駿 1988a: 21 に記載) と同源であると考えられる。fujurakū は *fujuru + akū から、fujurungga は *fujuru + -ngga からそれぞれ形成されたものと推測される。また、穆曄駿 (1988a: 21)

³ [ɹʃən] は安俊 (1986) や Zhang et al. (1989) においては [ɹʃən] の形で表記されている。

⁴ 満洲語文語の *fujuru の語源については、Sulfa (私信) は満洲語文語の fujuri を比較対象として挙げている。fujuri は『大清全書』において「根基、底裏、世臣」と訳されている。また、『大清全書』において fujuri amban が「世臣」と訳されていることから、この複合語における fujuri は「世襲」の意味を表すと考えられる。「世襲」が前提となる「大戸人家」(名門の家、由緒ある家系) が想定されることから、「体面、有風采」との間にも意味的関連があると考えられる。満洲語文語の fujuri の語源に関しては、Pope (1960: 12, 64, 121, 139) は満洲語文語の fujuri とモンゴル語の iʒayur、中古モンゴル語の huʒa'ur ~ hiʒa'ur 「Wurzel (根本)、Ursprung (起源)、Herkunft (出自)」、そして中古モンゴル語よりも早い時期の形式 *puʒaqūr との比較を行なっている。モンゴル語の iʒayur は、内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 (1999: 179) では iʒayur のように表記し、「根本、根源、本原」という意味に加えて、「家世、族源」の意味も挙げている。Цинциус и др. (1977: 302) は fujuri に対応するツングース諸語の同源語を挙げているが、Rozycki (1983: 115) はソロン語の ojōr との比較に言及している。そのソロン語の ojōr は、杜・道爾基 (1998: 504) では øjōer のように表記され、「根本、根基、基礎」や「家世、族源」などの意味が記述されている。モンゴル語におけるこの語の語頭子音は、p > f > h > ø という変化を辿ったと考えられる。f の段階で満洲語文語に借用され、さらに語頭子音が ø になった (脱落した) 段階でソロン語に借用されたと推測される。なお、Захаров (1875: 1091) による fujuri の漢語語源説には、筆者は同意しない。Sulfa と Pope などの見解を総合すると、満洲語文語のこの語はモンゴル語からの借用語であり、その意味が「根本」から「世襲」へと変化したと考えられる。さらに、そこから派生した fujurungga には、「体面、有風采」という新たな意味が生じている。

は、満洲語文語の [fuʃurak'ʊ] (メレンドルフ転写では fujurakū) がバラ語の [p'uʃiləɾʃən] に相当すると記している。

注目すべきは、(1d) と (1e) において、バラ語の [ɾʃən] が動詞の後ではなく名詞の後に現れている点である。満洲語文語の fujuru とバラ語における同源語 [fuʃilən] はいずれも名詞である。(1d) と (1e) の [p'uʃiləɾʃən], [p'idiləɾʃən], [p'udiləɾʃən] における [p'uʃilə], [p'idilə], [p'udilə] は、満洲語文語の *fujuru およびバラ語の [fuʃilən] と同源であると考えられるため、これらも名詞であろう。すなわち、バラ語の [ɾʃən] は、名詞と見なされる [p'uʃilə], [p'idilə], [p'udilə] の後に現れているのである。一方、少なくともキーレン語では、[ɾʃən] は動詞に後接し、名詞には後接しない。したがって、[p'uʃiləɾʃən] などの記録に誤記がなければ、バラ語において「名詞+[ɾʃən]」という構造が生じている理由について、さらなる解釈と検討が必要であると考ええる。

3.2. [k'u]

5 番目の否定標識は [k'u] である。穆曄駿が記録したバラ語の [k'u] の使用例は以下の通りである。

(2) (a) [iʃ'ik'u] 「不顺眼」(穆曄駿 1987: 7)

(b) 这德瓦集嘎库 (zhe de wajigaku) 「吃不完」(穆曄駿 1984b: 67)

[iʃ'ik'u] は満洲語文語の icakū と同源であり、その [k'u] の部分は満洲語文語の kū に対応すると考えられる。満洲語文語には icakū 「気に入らない」と icangga 「氣にいる」の対があり、これらはそれぞれ ici に否定標識 akū と派生接辞 -ngga が後接した形式と分析される。ici + akū が icakū へ融合し、icingga が icangga へ変化したと考えられる。ici を原形とするこの分析は、『大清太祖武皇帝実録』において、icakū と icangga がそれぞれ ici akū と icingga の形で確認されること(莊吉發 2018: 394-395)からも支持される。同様のパターンは、前述した満洲語文語の fujurakū と fujurangga にも見られる。しかし、icakū と fujurakū に対応するバラ語の形式はそれぞれ [iʃ'ik'u] と [p'uʃiləɾʃən] であり、否定を表す要素が [k'u] と [ɾʃən] で異なっている点が注目される。

また、「瓦集嘎库」(wajigaku) は満洲語文語の wajihakū に対応すると考えられる。wajigaku における ku も、前述の [iʃ'ik'u] における [k'u] と同様の否定要素であると考えられる。

4. むすび

本稿では、バラ語における 5 つの否定標識と他言語における対応形式の関係を考察した。[asəi], [ɛiwə], [ɾʃən] ~ [ʒʃən] は女真語に同源形式が認められ、[əgəi] はモンゴル語の ügei または満洲語文語の waka との関連性があると考えられる。一方、[k'u] は満洲語文語の kū と同源と見なせる。

また、キーレン語の [ɾʃən] とバラ語の [ɾʃən] ~ [ʒʃən] は形式が極めて類似し、いずれも否定を表す機能を持つが、キーレン語のそれは動詞にのみ後接するのに対し、バラ語のそれは動詞と名詞の両方に後接する例が確認されている。

参考文献

- 安俊 (1986) 『赫哲語簡簡誌』北京：民族出版社。
杜・道爾基 (1998) 『鄂漢詞典』海拉爾：内蒙古文化出版社。
高娃 (2005) 『満語蒙古語比較研究』北京：中央民族大学出版社。

- 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.
- 早田清冷 (2015) 「古典満洲語属格標識-i の研究」東京大学博士学位論文.
- Hölzl, Andreas. (2015) A typology of negation in Tungusic. *Studies in Language*. 39(1): 117-157.
- Hölzl, Andreas. (2018) Constructionalization areas: The case of negation in Manchu. In: Evie Coussé, Peter Andersson and Joel Olofsson (eds.), *Grammaticalization Meets Construction Grammar*. 241-276. Amsterdam: Benjamins.
- 池上二良 (1999[1993]) 「満洲語方言研究における穆曄駿氏採集資料について」『満洲語研究』321-343. 東京: 汲古書院.
- 金光平・金啓琮 (1980) 『女真語言文字研究』北京: 文物出版社.
- 金啓琮 (1984) 『女真文辞典』北京: 文物出版社.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment*. Kyoto: Horitsubunkasha.
- Menges, Karl. H. (1987) On Tungus alba- “non posse, не мочь” and other negative auxiliary verbs. *Central Asiatic Journal*. 31(1/2): 7-18.
- 穆曄駿 (1984a) 「吉祥如意的山—張広才嶺」『黒龍江文物叢刊』1984(1): 97.
- 穆曄駿 (1984b) 「居住在張広才嶺の満族 “巴拉人”」『黒龍江文物叢刊』1984(2): 64-68.
- 穆曄駿 (1985) 「阿勒楚喀満語語音簡論」『満語研究』1: 5-15.
- 穆曄駿 (1986) 「拉林満語語音概論」『満語研究』3: 2-30.
- 穆曄駿 (1987) 「巴拉語」『満語研究』5: 2-31, 128.
- 穆曄駿 (1988a) 「論巴拉語の語音変化」『満語研究』6: 1-26, 93.
- 穆曄駿 (1988b) 「阿勒楚喀満語元音発声の音変特点」『満語研究』7: 1-24.
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 (1999) 『蒙漢詞典 (増訂本)』呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- Poppe, Nicholas. (1960) *Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Teil I, Vergleichende Lautlehre*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Rozycki, William. (1983) *Mongol Elements in Manchu*. Doctoral dissertation. Indiana University.
- 鋤田智彦 (2023) 「大阪大学所蔵『満文西遊記』回目」『アルテス リベラレス』113: 159-177.
- Цинциус, В.И., В.А. Горцевская, В.Д. Колесникова, О.А. Константинова, К.А. Новикова, Т.И. Петрова и Т.Г. Бугаева. (1975) *Сравнительный словарь Тунгусо-Маньчжурских языков: Материалы к этимологическому словарю. Том I*. Ленинград: Наука.
- Цинциус, В.И., В.А. Горцевская, В.Д. Колесникова, О.А. Константинова, К.А. Новикова, Т.И. Петрова и Т.Г. Бугаева. (1977) *Сравнительный словарь Тунгусо-Маньчжурских языков: Материалы к этимологическому словарю. Том II*. Ленинград: Наука.
- 王海波 (2025) 「アルチュカ語語彙集—穆曄駿資料の満洲語文語索引—」『北方言語研究』15: 237-276.
- 烏拉熙春 (1985) 『満語読本』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.
- 烏拉熙春 (2009) 『明代の女真人: 「女真訳語」から「永寧寺記碑」へ』京都: 京都大学出版会.
- Захаров, И.И. (1875) *Полный Маньчжурско-Русский Словарь*. СПб.: Типография Императорской Академии Наукъ.
- Zhang, Yanchang, Xi Zhang and Shuyan Dai. (1989) *The Hezhen Language*. Changchun: Jilin University Press.
- 莊吉發 (編譯) (2018) 『文獻足徵—以〈大清太祖武皇帝實錄〉滿文本為中心的比較研究』

台北：文史哲出版社.

The Negation Markers in Bala

Haibo WANG
(Lingnan Normal University)

Keywords: Bala, negation marker, Written Manchu, Jurchen, Kilen

This paper examines the cognates of five negation markers in the Bala language across related languages. The study identifies that $[asəi]$, $[ɛiwə]$ and $[rʃən] \sim [zʃən]$ share cognates with Jurchen, while $[ɔgəi]$ shows potential connections to Mongolian *ügei* or Written Manchu *waka*. The marker $[k'u]$ is established as cognate with Written Manchu *-kū*. A notable distinction is observed between Kilen and Bala regarding $[rʃən]$: although formally and functionally similar, Kilen restricts this marker to verbal attachment, whereas Bala allows it in both verbal and nominal attachment.

(おう・かいほ boljon@163.com)